

メール

2025. 1. 20

メールを打つのが苦手である。メールの文面がうまく書けない。文章は、毎日のように書いている。原稿用紙にしたら3枚以上になる。にもかかわらず、メールの文は、一向に進歩が見られない。同様に、ラインも苦手である。それでも、メールよりは、まだラインのほうがよい。ラインは、それほど改まってはいない。碎けている。一方、メールはかしこまった改まった文面になる。途端に、下手な文章になってしまう。

こんな自分がずっと嫌だった。1月6日の月曜日から、第3学期がスタートした。その週は、たくさんさんのメールやラインが届いた。それはなぜか。2冊目となる拙著『人生は、燦々と 校長室日より100選』を皆様に届けたからである。謹呈である。

新年のスタート、仕事始めに合わせて送った。新年のあいさつも兼ねていた。これが失敗だった。どうやら、仕事始めを邪魔してしまったようである。この週は、慌ただしい。謹呈は、よくないタイミングだったかもしれない。

そんな状況にもかかわらず、お電話をくださる方、心のこもった長文のメールやラインをくださる方など、多くの反応をいただいた。読ませていただいて、すごいなあと思うような文面がたくさんあった。例えば、次の文章はどうだろうか。

高澤先生の温かなお人柄が表れた文章に懐かしさを感じながら、文章から伝わるメッセージ性や多岐にわたる話題に夢中になり、あっという間に読み上げてしまいました。管理職の視点で読ませていただくと「人材育成」の思いが端々に感じられ、読者は読むことを通して教職への思いを強くし、やる気が高まるのではないかと思います。いつの間にか背中を押されているような気がしました。また、書籍の構成からも分かりますが、高澤先生が日々の生活から謙虚に「学ぶ」ことで得られている知見なのだなとしみじみ思いながら、先生のお人柄を感じて最後まで気持ちよく読ませていただきました。

これは、長文の一部である。私には、とてもとてもこのようなメールは書けない。忙しい中で、本を読んでくださり、このようなメールを送ってくださったのである。頭が下がる。

そこで、考えた。どうやら、私は出会いというものに恵まれてきたようだ。中には、お手紙をいただいた方もいる。メール以上に改まったものである。そこには、私の懐かしい写真もあった。こちら、新学期が始まり、慌ただしい中で、時間をかけてくださったのである。涙が浮かんでくる。ありがたい。そして、素敵な出会いに感謝したい。

これからは、今までよりは、少しはましなメールが打てるよう努力していこうと思う。今回、たくさんの方からメールのモデル文をいただいたような気がする。改まったメールでも“こころ”が大切であることを学ぶことができた。